

# 『ジャック・スプラッツの盛衰、あるいは現代の芸術と流行の物語』における唯美主義的服装について

能澤 慧子

(平成10年9月30日受理)

## On the Pre-Aesthetic Dress in “The Rise and Fall of the Jack Spratts, A Tale of Modern Art and Fashion”

Keiko NOHZAWA

(Received on September 30, 1998)

### 1. はじめに

1860年代末の英国に姿を現し、80年代に最盛期を迎えた唯美主義運動(aesthetic movement)は、ファッションにも少なからぬ影響を及ぼし、83年頃にはエステティック・ドレス(aesthetic dress)と呼ばれる、男女の独特のスタイルの服装を生み出した。そのスタイルは中世末期からルネサンス初期にかけての時代や古代世界に美の本質を見出し、そうした時代の服装に立ち返ろうとしたものであった。

80年代初頭といえば、特徴的な服装としては、他に合理服(レイショナル・ドレス rational dress)が登場している。合理服が衣服の機能性、肉体の健康、いうならば合理性に主眼を置いたのに対して、エステティック・ドレスは当時の一般的流行のスタイルの美的な面への批判と、慣習に捉われない服飾の理想美の追求を目指していた。その結果、両者間にいくつもの共通点が生じたことは興味深い。即ち、女性の服装での自然な布の流れを十分に生かした、ハイ・ウエストの直線的シルエット、コルセットの追放、パフ・スリーブ、男性の服装でのジャケット型の上着、柔らかなネクタイ、ブリーチズなどである。

現象としてはどちらも小規模で、ことにエステティック・ドレスは比較的短命であった。しかし、当時の一般的流行に対する批判を実践に移したことで、そしてその結果、20世紀ファッションの源流をなし、そのスタイルを予兆した点で重要な意味を持っていたことは、ニュート

ン<sup>1)</sup>、ドゥ・マルリー<sup>2)</sup>、ウォークリー<sup>3)</sup>の著作に詳細に指摘されており、その他、唯美主義運動全体に関する美術史家の著作<sup>4)</sup>にも少なからず触れられている。

唯美主義運動の中で、独特な趣味による服装の一つの定型が形成され、エステティック・ドレスという用語が生まれたのは1883年のことである。この年、グロヴナー・ギャラリーの副支配人夫人が、ドレープ性に富んだ柔らかい布を作るため、モスリンをポテト蒸し器で蒸したのが気に入った人気女優のエレン・テリーがそれを舞台衣装に用いた。その後、エステティック・ドレスの名が広まったとされる。

唯美主義運動は83年の遙か以前、60年代からすでにその胎動を始めており、この傾向を持つ絵画作品にはエステティック・ドレスを予兆する姿が豊富に描かれていたし、これらの作品のモデルを務めた画家の家族や周辺の人々が、実生活でもそうした服装をしていたことはよく知られている<sup>5)</sup>。また本稿掲出の物語の挿絵画家、デュ・モーリア<sup>6)</sup>は、早くも79年に同じ『パンチ』誌掲載の『チマブーエ・ブラウン一家』<sup>7)</sup>で、ほぼ定型化されたエステティック・ドレスを描いている。(図1)

エステティック・ドレスはどの様に社会に認識され、理解され、感じられたのだろうか? この関心から、特にこのドレスの定型化がなされる以前に時代を縫い、『パンチ』誌の1878年9月7日号から8回に渡って掲載された、唯美主義芸術家を主人公とした挿絵入り物語、『ジャック・スプラッツの盛衰——現代芸術と流行の物語』<sup>8)</sup>を取り上げ、当時の社会が捉えた唯美主義者の美意識、生活様式、服装などについての検討を試みた。

尚、本稿ではエステティック・ドレス定型化以前の服



図1 チマブーエ・ブラウン家の子供達(部分)

装の意味で、唯美主義的服装 (pre-aesthetic dress) という表現を用いた。

## 2. 服飾史の資料としての『パンチ』誌と『ジャック・スプラッツの盛衰』

本題に入る前に、掲出の物語の掲載誌、『パンチ』の資料的な価値について、少々触れておきたい。

イギリスの挿絵入り週刊誌『パンチ』は、周知のとおり、1841年の創刊以来、諷刺画と社会批判を特徴とし、ことに創刊直後は政治・王室・経済・社会問題に焦点を当てた。例えば衣服に関する記事では、43年12月16日号の『シャツの歌』<sup>9)</sup>が有名である。これは二人の幼子を抱えた未亡人が、生活費のために囚人か奴隷のごとく日夜針仕事に追われる様を表した11連の詩であり、労働者階級の悲惨を痛切に訴えている。この詩の掲載により、同誌の売り上げは3倍以上にも伸びたとされ(創刊号は1万部)、そこに当時のイギリス社会が抱えていた問題の大きさと、この雑誌の初期の存在意義が伺えよう。

しかし50年代末以降、『パンチ』誌の性格は大きく変化した。当初の革命的とも言える程の批判精神は影を潜め、代わりに同時代の流行、風俗に紙面を大きく割くようになったのである。この変化について、ウォークリーはいくつかの理由を挙げている。イギリスの経済が成長し、繁栄の時期を迎え、社会全体が一般的に豊かになっ

たこと、それにつれて女性のモード熱が高まり、行き過ぎた例が多々登場したこと、61年のヴィクトリア女王の夫君であるアルバート公の死により国民の王室批判が鎮まり、そうした主題を避けざるを得なかったこと、そして創刊当時若かった『パンチ』誌の編集者や執筆者、イラストレーターたちが中年に達したり、一部には入れ替わったこと、などである<sup>10)</sup>。

こうした事情により、60年代から1992年の廃刊まで、同誌は独特のファッション史資料の宝庫としての性格を帯びることとなった。つまり、当時のパリ・モードに傾倒していたファッション・ブックのほとんどが掲載しなかった小規模な、あるいは特殊で風変わりな流行をも取り上げたため、パリ・モードも含めたさまざまな類の流行に対する社会の受け止め方、反応などまでの記録が残されたのである。

しかも、諷刺という独特の姿勢を常に保った『パンチ』誌の描写は、ファッション・ブックが主題としたファッションの優美さ、魅力などの正の価値よりも、それらの蔭に隠れながら、時折り垣間姿を見せる、それらに相反する可笑しさ、醜さなどの、負に価値付けられそうな特性を強調、誇張する。確かに、そのためにタブロー画の緻密さや、厳密な写実性はしばしば犠牲にされる。だがこの異なった視点からの、覚めた、しかし想像力豊かな部外者による表現力溢れる記録は、結果としてファッション史にリアリティーをもたらしたのである。

唯美主義運動は広範な芸術作品を遺したが、その運動の主旨には、作品としての芸術に留まらず、生活そのものを芸術と化すことを含んでいた。しかし芸術家やその愛好家たちが実際に営んだ芸術としての生活そのものは形として遺されることはなく、現在では、それらに関する記録をよすがに想像するしかない。実は『パンチ』誌は、この唯美主義運動の芸術家たちやその愛好家たちを極めて頻繁に諷刺の対象として取り上げたのである。

こうした主題を得意としたのは同誌の代表的イラストレーターの一人、デュ・モーリアであり、『ジャック・スプラッツの盛衰』の挿絵も彼の手によっており、この主題による彼の作品群の極く初期の部類に属する。上述の通り、この連載の後、彼はこの種の主題を持つ作品の中で、ある程度定型化した唯美主義者独特の服装を描いている。それらはすでに上述の著作を含むいくつかの文献に、繰り返し紹介されているにもかかわらず、ここに掲出する連載読物を取り上げている文献は少なく<sup>11)</sup>、



図2 第1話挿絵

筆者は寡聞にしてそう多くに出会っていない。

この作品は、一人の唯美主義芸術家とその家族の趣味と生活様式、それらを取り囲む当時のいくつかの社会層との関わりをつぶさに言葉と挿絵の両方で描写しており、また掲載年代が78年という、同運動の記録としては比較的早い時期である事も興味深く、エスティック・ドレス成立以前の状況を知る上で好個の資料と言えよう。

### 3. あらすじ

この読物は日本語に訳出して、全編で400字約100枚ほどの長さであるが、ここでは筋の展開を紹介する。

第一話はロンドン郊外に住むジャック・スブラッツなる一人の青年画家の紹介に始まる。妻と彼の年齢は合わせて39才、男女の幼い双子との平和で愛情に満ちた家庭を営んでいる。

住まいはアン女王時代、あるいはそれ以前に建てられた赤煉瓦作りの古いもので、庭には種々の植物が自然なままに茂り、彼の仕事部屋は中世風の品々に溢れ、近代的雰囲気からは程遠い。妻は彼の傍で、子供たちを遊ばせながら、古い靴下の繕い、糸紡ぎ、刺繍、中世騎士物語の朗読、あるいは隠れんぼ、あや取り、羽根つき、縄跳びなど古典的な遊びに時を過ごした。

ジャックには幾人かの親友がいて、互いに深く信頼し合い、ことに現代社会を嫌い、中世風を高く評価すると

いう面で、深い一致を見ていた。彼らは特有の美術観から、王立美術院を軽蔑していたし、グロヴナー・ギャラリーに対しても同様であった。

ともかくも、スブラッツ一家は現状にほとんど完全に満足していた。唯一不満なのは、家の前に立つ、赤い醜悪なポストぐらいであって、当局に改善の方法を申し出ていたが、無視されていた。

第2話ではスブラッツ家に異変が起こる。ジャックが妻をモデルに描いた中世趣味の絵画『靴下を繕う女』が王立美術院に受け入れられ、大広間に飾られるという事件が起きたのだ。絵は大評判となり、大勢の観客が押し寄せ、絵の近くに警官を配するという騒ぎ。ジャックはたちまち世紀の大天才の名を恣にする。

天才画家とその美しい妻は、社交界にデビューを果たし、特に妻のほうは間もなくその花形としてもはやされることになった。

そこで二人の服装は一変する。どちらも中世風衣装を捨て、紳士淑女の当世風の衣装に切り替えたのだ。

さて世俗の社交界の寵児となった二人は、かつて完全な趣味の一致をみていた親友グループと疎遠になった。彼等がスブラッツ家に集まったある夕べ、従来通り既製服を脱いで、その下に隠し着いていた緑色のダブリットと紫色のタイツを顕したのを見て、スブラッツ夫人が嘲笑して以来、完全に親交を絶ってしまった。このことがきっ

かけで、夫婦の間にも、小さい亀裂が生じた。

第3話では、ジャック・スプラッツ夫妻が、両方とも妻の美しさにこれまで気づいていなかった、むしろ醜いとさえ思っていたこと、そして彼女は今や、自分の美しさに気づき、自信を持ち、反面、無意識による高貴な魅力を捨ててしまったことが語られる。

彼女は夫とその友人以外の多種多様な男性と出会ったが、彼女なりに世の男性を、天才と洒落者の二つに分類した。天才は抽象的な話し方をして、服装には無頓着、振る舞いは異常であり、洒落者、特に豪華に着飾ったきらびやかな洒落者 (gorgeous gilded glittering swells) はあからさまにお世辞を口にし、退屈させず、ずっと楽しい、というのが彼女の見解であった。

そんな訳で、洒落者たちの待ち受ける社交界に夢中になり、他方その美しさにより、やがて女性のファッションの源になって行く。

第4話では新しいキャラクターが登場する。ジャックの唯一の血縁である祖父、靴下商を営む道化好きの老人である。彼はどこでも冗談、駄洒落を飛ばして、中心人物にならなければ気が済まないタイプで、スプラッツ夫人はかねてより、あまり好んではいなかった。

祖父の方は絵描きを乞食のような仕事と見做して嫌ってはいたものの、孫を愛していた。その孫の家では、これまで実際にあったこともなかった上流社会の人々を相手に道化を演じて、孫夫婦の囂聲を買っていた。

ある日、彼がジャックを訪ねると、先客に高名な洒落者の一人、ペントンヴィル公爵がいた。老人は遠慮なく中に入り、立ち去るために夫人に腰を屈めてお辞儀をする公爵の上着の後ろ裾の割れ目のポケットに、自分の店の広告用ちらしを、気づかれぬ様押し込んだ。この無礼さに、夫人の怒りは爆発し、両者の中は決裂した。

こうして、スプラッツ夫妻は社交界に受け入れられてから、旧友たちと老祖父との交際を絶ったのである。

第5話になると、ジャックは社交界に少々嫌気がさし始めている。当意即妙の受け答え、意味のない話題、軽い冗談、女性へのお世辞など、彼には苦手だった。夜会でも活発に妻が踊り、洒落者達の話に耳を傾けるのを、壁や戸にもたれて、離れて眺めているだけだった。

それに対して、気の利いた会話などジャックよりも更に不向きで、話たり聞くためではなく、ただ眺められるために造られた女性であった妻の方は、社交界の魅惑のとりことなり、いつしか、夫抜きで、洒落者達のエスコ

ートで出かけることが多くなった。

双子の子供たちは母親に見捨てられ、不器用な父親とあまり仕事熱心ではない乳母しかいない家庭で、汚れた服を着て、入浴もさせてもらえず、母親の帰りを夜更けまで待つのであった。

双子たちよりも更に状況の芳しくないのは、ジャックの方であった。彼は殺到する注文に応じて、『靴下を繕う女』を何枚も描いていた。妻の衣装代稼ぎのために断れず、金目当ての仕事に追われていたのだ。しかし今では妻が留守がちなので、モデルにすることができない。雇いのモデルを使って、ポーズや服装や背景など色々に変えて描くが、モデルのためであろうか、あの最初の一作を越える作品ができない。そして、あれほど押しかけた画商の足が、次第に遠のくようになっていた。

第6話は社交界でのスプラッツ夫人の成功と、名声の大衆化が語られる。彼女は世間知らずで、社交界での駆け引きや、巧みな話術には無縁であったし、商人の家の出であり、また教育も無く、男性に伍するような能力や資質を持っているわけでもない。彼女の人気が高まるにつれて、社交界の女性達の意地悪も多くなった。それに洒落者たちの気紛れも、彼女を一喜一憂させた。

しかし、間もなく彼女は女性の意地悪に対処する態度を身につけ、自信を持つようになった。彼女の評判は新聞や週刊誌を通じて、上流社会のみならず、広く一般社会に伝えられ、彼女の肖像画は至る所に印刷され、写真まで販売された。彼女の行く先にはいつも黒山の人だかりができて、どこでも人々に追いかけられる、時には警官が護衛につくという騒ぎとなったのである。

ジャック・スプラッツの最初の『靴下を繕う女』の成功から約1年経った第7話では、すでに第5話で語られたジャック自身の没落の兆しが、明らかな現実となり、夫人の方も社交界の女王の座から転落する。

ピグマリオン・F・ピノウ<sup>12)</sup>なる若い彫刻家が、妻をモデルに制作した『人魚姫』が、王立美術院のホールに飾られ、彼はその一作で、同会員に推挙されたのだ。そして彼とその妻とは一年前のスプラッツ夫妻とほとんど同じ手順で、しかもよりスピーディーに社交界と王立美術院との寵児となり、前任者は忘れられてしまう。

スプラッツの方は、この年、8枚の作品を王立美術院に送ったが、すべて拒否され、彼の催した晩餐会はほとんどの招待客から無視された。

第8話の冒頭、スプラッツ夫妻の最悪の事態が語られ



る。二人が王立美術院と社交界から完全に締め出されたのと同時に、ジャックが先頃の贅沢のために破産し、家も庭も、さまざまな古風な品々も、ジャックの作品も、すべて差し押さえられ、競売に付された。

しかし最後のシーンは決して悲劇的ではない。一家は近代的な郊外の、近代的設備（ガス、水道、換気扇など）の整った二戸建式住宅に移り住んでいる。ジャックは祖父と仲直りして、今では祖父の営む靴下商を本業としている。夫人の方は、隣人たちと変わらない普通の服装で、紡ぎ車ではなく、ミシンを購入し、縄跳びではなくローン・テニスを楽しむ、快活な主婦となった。ジャックの友人たちも仲直りして、しばしばスプラッツ家に集まるのだが、彼等も食べられない芸術に見切りをつけて商売の道へと進み、それ相応に成功している。彼等の服装も今では普通の紳士と変わらない。

経験が若者を賢くした、という訳で、めでたく幕を閉じる。

#### 4. 唯美主義者、王立美術院、洒落者、そして商人

この物語には4種の社会が登場する。芸術家、洒落者、専門職、商人がそれぞれに形成する社会である。専門職は具体的人物は描かれていないが、他の3種についてはモデルの人物を使って、詳しい描写がなされている。

「彼等は堅固な急進的思想により、貴族を嫌い、その存在を無視していた。専門職階級を避けたのは、科学的、実用主義的傾向を軽蔑していたからだ。また自らの出自である中産階級を忌み嫌っていた。この階級が俗物であり、労働者を尊敬していると公言しながら、その実、彼等をなるべく見ないようにしているからだ。（中略）彼等は世間から傲然として距離を保っていた。」<sup>13)</sup>

この文章には彼等の社会に対する姿勢が端的に表われている。まず、この「彼等」とは、ジャック・スプラッツとその親友たちであり、第1番目の芸術家達である。彼等は独自の美意識、唯美主義の下に、社会から孤立して、浮き世離れた生活を営んでいる。中でも主人公は「無名で、高貴の出でもない」<sup>14)</sup>のに、何ら職業に精を出すでもなく、どうやら、あまり売れもしない絵を描いているだけである。おそらく、生活に困らない程度の資産を親から受け継ぎ、そのおかげで趣味的生活に浸っていられるのであろう。

しかし、彼等は芸術家社会のすべてではない。むしろ異端者のグループであり、実は王立美術院会員が形成す

る、世間に正統派と認められた権威ある芸術家グループが存在した。ジャック・スプラッツとその仲間達はこのグループを無視し、また無視されてきた。しかし、皮肉なことに、彼等に評価されたことが、主人公に栄光をもたらし、洒落者の社会への橋渡しになった。

次いで2番目の洒落者たちであるが、これは「豪華に着飾ったきらびやかな洒落者」と繰り返しい形容句をつけて説明される、貴族や高位の軍人たちである。

「洒落者は、馬、犬、釣り竿などに親しむ。それらは絵や詩や、知的な問題を身に着けるよりも易しい。眉根を寄せたり、頬をこけさせたり、若々しい肉体を損なったりはしない。気楽に流れる会話は、大多数の人々の受容能力に適合し、その黄金の沈黙は面白くもない高邁な思考なんぞから生まれるわけではない。」<sup>15)</sup>

その「気楽に流れる会話」の中には、女性への世辞が含まれていたのは勿論である。

「美女に会ったなら、いくつになろうと、どこであろうと、儀礼的に遮られない限り、洒落者は常に賞賛を表し、その中には決して抽象的な部分はない。」<sup>16)</sup>

第3番目の社会を形成する商人、あるいは中産階級を代表するのが、ジャック・スプラッツの祖父である。彼は商売熱心で活気に溢れた人物で、芸術家を乞食のような恥ずべき身分と見なし、他方上流階級に敬意を抱き、また自分を常に回りの中心にしておきたい、人がどう思



図3 第2話挿絵(部分)

っているかには無頓着という無神経さにより、作中では当初「俗物」と決め付けられている。スプラッツ夫人の父親も商人で、こちらは油を商っていた。彼女を社交界の女王の座から蹴落とすためにささやかれるのが、この事実であった。

ところで、唯美主義者の社会観は物語の展開と共に、いとも容易く変化してゆく。彼らが長らく「嫌い、その存在を無視していた」<sup>17)</sup>はずの貴族の社会、洒落者の世界へ、主人公夫妻はのめりこんで行く。しかし1年足らずで、早くも夫妻は洒落者達に飽きられ、経済的不如意も手伝って、その世界から締め出されてしまう。ここには唯美主義を浅薄で表面的で、脆弱で気紛れとする作者の捉え方があり、そもそもスプラッツやミノウという雑魚の意味を持つ命名にも、それが暗示されている。

「スプラッツ君（中略）、イギリスのちっぽけな雑魚が熱烈に慕う海の悠々たる怪物は、君とはほぼ同程度に気紛れになれるってことを知ってるかい。怪物たちのために古い友人を捨てた君と同様、彼らも新しい友人を、一層新しい友人のために、捨てる用意ができていますのさ。大海原の怪物の傍を泳ぐという君の好みのためには、きれいな顔はあせてはならず、きれいな絵はいつも成功せねばならず、いつでも金の用意ができていなければならぬ。そして、もし彼らのご機嫌をとるのに君が疲れようと、疲れまいと、どのみち君はただのスプラッツ（雑魚）に過ぎない。イルカは君を君をころがし、サメは、そこをどけ、お前なんか食う価値もないと言うだろう。気のいい鯨でさえ、ある日、次の小魚のために、鰭を広げて君をどかすだけだろう。そんなことを聞いたら、君の雑魚仲間はどうなにか笑うことだろう。」<sup>18)</sup>

世間の怪物、即ち社交界の人々の気紛れ、彼らの芸術家の扱い方、それに対するジャックのような若い芸術家の置かれている状況を、作者はこんな風に喩えている。

また貴族を中心とした社交界に飽きられ、放逐されると、スプラッツ（雑魚）たる唯美主義者達は、かつて軽蔑していた俗物、商人の世界へと落ち着くことによって幸福を掴むのであり、ここが『パンチ』誌の痛烈な皮肉の焦点となっていると言えよう。

蛇足ではあるが、これまで見てきた3種類の世界、すなわち芸術家、洒落者、商人のそれぞれが形成する社会という発想は、1830年にすでにバルザックが掲げた「現代社会がつくりだした三階級」、つまり、「労働する人間、思考する人間、何もしない人間」<sup>19)</sup>のそれぞれの階級に

およそ呼応しているのは興味深い。順序が前後するが、「思考する人間」は芸術家を、「何もしない人間」は洒落者を意味し、「労働する人間」の中には労働者階級と小商人が含まれることをつけ加えておきたい。

## 5. 唯美主義的生活について

物語の中で詳細に語られている3種類の社会の内、芸術家、つまりジャック・スプラッツを中心としたグループの生活についての記述を拾ってみよう。

科学や実用主義を嫌うスプラッツ家の生活は総じて前近代的だ。「蒸気や電話線などで汚されていない」<sup>20)</sup>という冒頭の説明が、まず近代性を否定する唯美主義的生活の基調を表している。家は、すでにあらずじに述べた通り、「赤煉瓦造りで、アン女王時代、あるいはそれ以前に建てられ、以来一度も修復されたことも、建て増されたこともなかった。」<sup>21)</sup>18世紀初頭のアン女王時代の建築は、19世紀後期に住宅の様式に取り入れられて以来、注目を集めた。その控え目で簡素な形態、イギリス民家に伝統的な素朴で鄙びたディテールは、当時の建築界に多大な影響を与え、19世紀半ばのゴシック・リヴァイアラルやクラシック様式の流行の後を受け継いだ。ここにも、前近代的な好みが見え隠れしている。

前近代性と自然主義は深く結びつき、スプラッツ家の崩れ落ちそうな塀に囲まれた庭にはいらくさ、あざみ、マリーゴールド、向日葵、ひなげしが咲き乱れ、スイートピーの蔓が日時計を覆い隠し、芝生は刈られたこともない。こうした趣味が赤いポストに嫌悪感を抱かせ、穏やかな性格にしては勇敢にも、この醜惡な品物の撤去を申し出ると言う行為を促したのである。

前近代性は室内の調度にも及び、青い陶磁器（後に同じ『パンチ』誌に80年代に繰り返し登場する主題となる）、丸い鏡、色褪せたタペストリー、真鍮の燭台、中世の武器や鎧、様々な古楽器が挙げられ、堆積もった埃が全体の調和を生んでいる、と語られる。

スプラッツ一家はこの前近代的で自然主義的環境に立て籠り、あまり外界との交渉を持たない。極めて深い信頼関係にある友人達と祖父の他に、彼らを訪れる者は無く、夫妻の方から訪問することもない。現代物の小説、雑誌、新聞も決して読まない。娯楽と言えば、「3. あらずじ」で挙げたような古風で古典的で他愛もない遊戯だった。音楽はイタリアかフランスの古謡を、ロンドン訛りにゆっくりと歌うとされている。

第1話の挿絵(図2)では、庭の池のほとり、画面中央に座っているスブラット夫妻は、綾取りをしており、二人の幼子は虚空を見つめたまま動かない。「唯美的な幼い心に、風変わりな空想をめぐらせ」<sup>22)</sup> ているのである。一人の友人はリュートを奏で、「もう一人の友人は古い物語について瞑想し、昔日の輝きを物悲しく回想している」<sup>23)</sup> と皮肉に語られる。

こうして、文章と挿絵の両方が、彼等の生活に見られる自然主義、非世俗性、懐古趣味に加えて、さらに厭世観まで感じさせながら、その風変わり、奇矯を誇張している。

## 6. 唯美主義的服装とファッショナブルな服装(男性)

唯美主義者は生活に強い関心を寄せたため、その一部を成す服装には多大な意味を見出していた。1878年時点では、上述の通り、まだエステティック・ドレスという言葉も、特定の様式も成立してはいなかったものの、この物語には、想像、あるいは予測による部分が大きいにせよ、すでに明らかに隣人達とは異なったスブラット一家と友人達の独特の服装が、文章と挿絵の両方で描出されている。

まず男性の服装では、イタリア風が強調されている。

「ロンドンの繁華街での彼らの姿は目立っていた。形の崩れた帽子、長い外套、安物の銘柄の既製服を着て外

出するからだ。しかし、夕闇の中で、ジャック・スブラットを訪れたり、晩鐘の刻に互いに訪問し合う時は、安物の服を脱いで、その下から、出費をもとめせずに整えた、彼らが恋慕うにしのイタリヤ風の豪華な衣装を着けた姿を、現すのである。彼らはこれを、いつものように、荘重な態度で行った。」<sup>24)</sup>

また第1話の挿絵(図2)では、ジャックを始め、唯美主義者達は15世紀風のパフ・スリーヴのついたダブリットにホーズを着け、足には爪先が長く伸びて反り返ったブーレーヌを履いている。一人の男性の袖に16世紀に流行した切込状の装飾が見られ、またブリーチズを穿いている。髪は中世から16世紀前半までの男性のように長く肩に垂れかかり、帽子は縁の広い柔らかな型で、孔雀の羽飾りが見られる。

続いて第2話の挿絵(図3)、スブラット夫妻が始めて招待された准男爵家の夜会の情景に目を向けよう。ジャックはこの時、「すっかり現代生活の凡庸さに譲歩して、紳士の完全な夜会服一式(この特別の機会のために郊外のテイラーに誂えた)を着け、ボタン穴に洒落た孔雀の羽根を飾った。同時に、彼が真に簡素で、世俗的ではないことを示すために、そこいらの荷造り紐で懐中時計を提げ、豊かな巻毛には櫛を入れなかった。」<sup>25)</sup>

第3話の挿絵では「唯美主義的若き天才達」<sup>26)</sup>(図4)と「豪華な若き洒落者達」<sup>27)</sup>(図5)が対比されている。

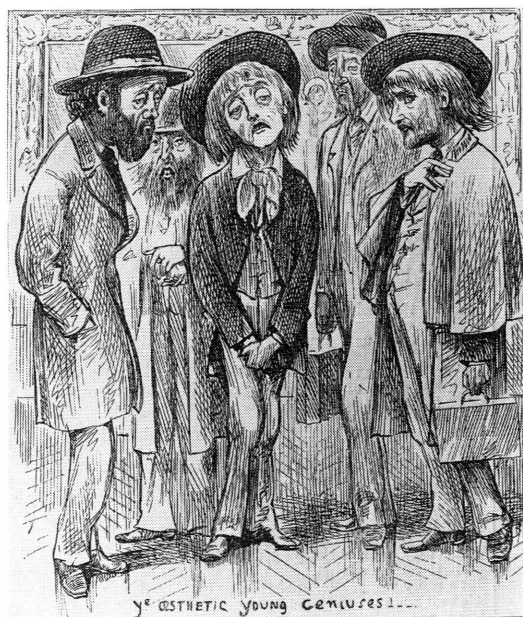


図4 第3話挿絵(部分) 唯美主義的若き天才達

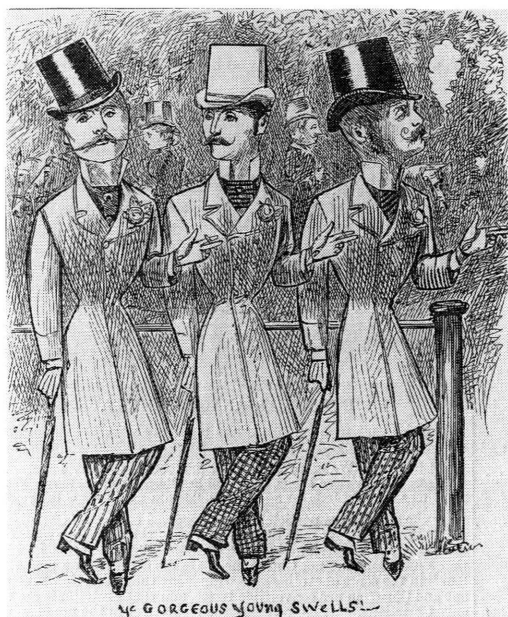


図5 第3話挿絵(部分) 豪華な若き洒落者達

前者では、フロックコート、燕尾服、インヴァネスと、多種多様である。シャツの衿は低く柔らかで、同じく柔らかいスカーフ状のネッククロスを結び垂らしている。帽子は山が丸く、つば広で、ズボンはゆるやかで膝が出ている。おそらく、その下にブリーチスを穿いているからであろう。髪の毛は皆一様に長く、手入れをしていないか、あるいはしていない風を装っている。画面中央のジャック・スブラッツは髭がないらしいが、他の人物はあご髭を伸ばし、頬髭の見える者もいる。

彼等は首を重そうに右側に傾げるか、またはうなだれており、僅かに開いた脚は不安定な印象を与えている。目や眉は垂れ下がり、悲しげで、物憂げで、表情は生気に乏しく、病的で不気味な雰囲気を漂わせている。

この絵と並べられた「豪華な若き洒落者」の図、即ち当時のファッション・ブックに登場する一般的な男性のスタイルは、多様な服装のスタイルに見慣れた現代人にも、この『パンチ』誌が強調しようとする唯美主義者の風体の奇矯さを、理解しやすくしている。

ここでは洒落者達は、揃ってきりっとウエストを細く仕立てたフロックコート、縞柄の細身のズボン、ハイカラーのシャツにクラヴァット、タイ・ピン、艶やかなトップハット、ぴったりにあった手袋、両端を跳ね上げた口ひげ、細く巻いた、ボタン穴には花飾り、細く巻き上げた傘、おそらく手入れの行き届いた靴、という服装である。彼等は常に「風采が良く、膝の辺りでふくらんだズボンや、爪先がそり返り、底が薄いブーツや靴は決してはかないし、ボタン穴に差した花は詩であり、帽子、ネクタイ、手袋はいつも新しく、最高級品である。」<sup>28)</sup>

彼等は傲然と首をもたげ、シガレットを挟んだ左手を意識的に突き出し、脚を軽く交差させ、右手に持った傘でバランスを保った安定したポーズを取っている。自信ありそうな、冷たく、しかも軽快な印象である。

実は第2話で、つまり初めての夜会に出席した直後、ジャック・スブラッツは郊外ではなく、ウエスト・エンドの一流のテラーに豪華な夜会服を眺めている。

「黒ヴェルヴェットの衿で、波模様入りの絹裏の美しい燕尾服、やや広い目のズボン、洒落たパンプス、白糸でかかるとに刺繍した黒絹の靴下という組み合わせだ。そしてボタン穴にはステファノティスを飾った。」<sup>29)</sup>

こうして彼は割合と早い段階で「唯美主義的若き芸術家」の身なりを脱いで、完全な「豪華な若き洒落者」の衣装に着替えしようとしたのである。

そして第4話以降の挿絵(図6)では、ジャック・スブラッツは疎外感を感じているため、表情は生気に欠けてはいるが、「豪華な若き洒落者」とそう変わらない、隙のないスタイルへ変身を遂げている。さらに終章でのスブラッツとその親友達の服装は、ウエストエンドのテラーで求めた衣服、スブラッツ店で卸値で手に入れた手袋にスカーフ、仲間の一人、かつては詩人であったパイの店の帽子、そして短く刈り込んだ髪とひげ、と言う具合に著しい変化を遂げて物語は終わっている。

この物語では、まず唯美主義者の服装として、中世や15、6世紀のイタリアのスタイルを振り当て、そうした服装の彼等の異様さを描き出している。他方、同時代の服装で往来を歩く彼等には、一種独特の表情と風貌を与えている。その風貌は忌み嫌う現実社会に生きることに対して彼等が抱いているであろう辛さや嫌悪感、恐怖、あるいは倦怠感と失意といったものの印象を与え、見るものに薄気味悪さを感じさせずにおかない。

## 7. 唯美主義的服装とファッショナブルな服装(女性)

次に、女性の唯美主義者、スブラッツ夫人の服装を取り上げよう。第1話の挿絵(図2)では、彼女はアーミンの毛皮で縁どったほっそりとした上着を着ている。座っているため、シルエット全体を見ることはできないが、78年頃の一般的流行のバスル・スタイルではない、簡素なスカートらしきことは伺える。

第2話、初めての夜会の場面では、薄手の上等の麻地のスモックと、シャルーン地の裏を付け、アーミンで縁取ったセルジュデュソワ地のガウンを着て、15世紀のエナン風帽子には刺繍入りのヴェールを垂らし、首には16世紀後半に流行した髷衿、ラフを着けている。彼女はこ



図6 第4話挿絵(部分)

の姿で夫の作品、『靴下を繕う女』そのままに、その場で活人画を演じて喝采を浴びたのである(図3)。

とは言え、彼女はこの夜会の翌朝、特有の趣味に添った風変わりな衣装を脱ぎ捨て、最新のパリ・モードに身を包む。「スプラッツ夫人の抱く現代女性の服装に対する根強い嫌悪は、貴族に対する偏見と同じく、長持ちはしなかった」<sup>30)</sup>のである。そこで、彼女は「現代ファッションのエキセントリックさへの軽蔑により、これまで着ていた中世風の衣服を脱ぎ捨て、都会の最高のドレスメーカーの手に身をゆだねた。」<sup>31)</sup>

第4話以降の挿絵(図6)に現れるスプラッツ夫人はどれもウエストを首よりも細く締め、胸の膨らみを強調した胴部と、裾で人魚のように広がる細身のスカートからなるドレスを着ている。それはまさに70年代末から80年代初頭までの短期間に流行したパリ・モードである。

スプラッツ夫人の後を継いで、社交界の花形の地位に就いたミノウ夫人の服装も、当時の一般的ファッションとは著しく異なっている。

「ミノウ夫人の足はスプラッツ夫人の足よりも大きい。が、より本物の芸術的法則に則って構成されている。要するにギリシャ型であり、他方スプラッツ夫人の方は、俗物には人気があるが、実はギリシャ型というよりはローマ型である。つまり、時代が下がり、芸術の墮落期に属している(後略)」<sup>32)</sup>

古代趣味は服装にも反映され、かつてのスプラッツ夫人の中世趣味に対して、第7話の挿絵(図7)のミノウ夫人の服装には古代風の趣味が伺える。その筆致から、ウエストに切替のない、直線的裁断のシンプルなドレスで、下着類は省き、素肌に直接着ていると推測される。

夫人と並んだミノウ氏は、瀟洒な夜会服を着てはいるが、まさに1年前のスプラッツ氏や彼の友人達同様、髪は伸び放題、あご髭と口髭は連続し、手入れは行き届かない風であり、悲しげに目を伏せ、うなだれている。

「その彫刻家(ミノウ氏)は少しも出しゃばったりしない、控え目な態度であったので、王立美術院はすっかり気を良くして、彼の意に反して、ただちに王立美術院の正会員に推挙した。」<sup>33)</sup>

この叙述の「彼の意に反して」という挿入句から、ミノウ氏も必ずしもスプラッツ達ほど王立美術院に対して横柄ではなかったものの、決して自ら正統派を任じていたわけではなく、むしろ唯美主義者に近かったらしいことが伺える。とするなら、同夫人の服装を、唯美主義

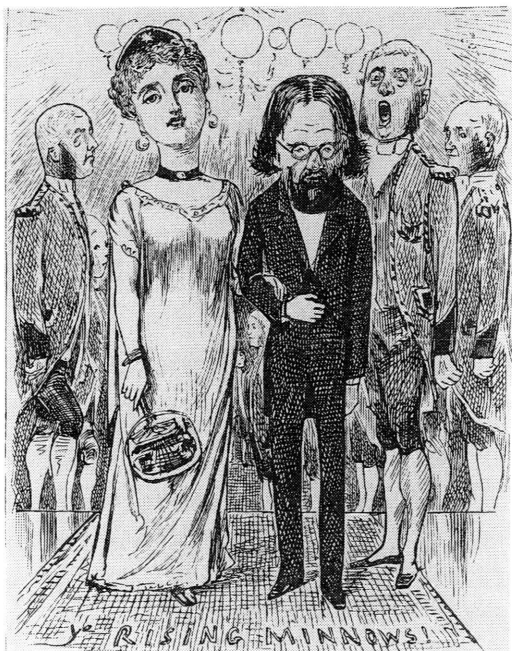


図7 第7話挿絵(部分) ミノウ夫妻

者のもう一つの服装の表現と看做すことができよう。

男性の唯美主義者が、歴史的服装の他に、同時代的服装をして描かれることがあったのに対して、女性の場合は、唯美主義的服装をすっぱり捨てる以前は、すべて歴史的な服装のみである。そして、同時代的服装の時の方が一層美しいとしながらも、彼女等の唯美主義的服装を決して醜いとはしていない。「彼女はその風変わりで古風な服装でも、常に愛らしく見えていた」。<sup>34)</sup> 作者は同じ唯美主義的服装でも、女性の場合にはある程度その美しさを認めながら、比較的、男性に辛辣なのである。

## 8. 唯美主義の認識

諷刺が諷刺として成立し、読者がそこに可笑しさを覚えるためには、現実が、ややもすると絵の中のような事態に立ち至る可能性がある、と思わせるような、極めて近い、あるいは類似した状況でなければならない。誇張すればすぐに描かれた状況そのものになりうる、といった要素が現実の内部に存在しなければならない。

ところで、唯美主義者たちは、生活、あるいは人生そのものを美的にすることを試みた。その結果、絵画などの芸術作品の構成する空間の中の美的現象を、実際の生活場面に移行させようとする姿勢が生まれた。この姿勢を諷刺の対象としているのが、絵画や彫刻を生きた人間

が演じる活人画という設定であり、作中、スブラッツ夫妻とミノウ夫妻の両方が演じている。

活人画として、囲われた空間に納まっているには美しくとも、その画中の、遠い過去の身なりをした人物が額縁から抜け出して、古風なしぐさで現実空間を横行する不気味さは否定できまい。作者はこの種の不気味さを強調して、懐旧の念に浸りがちで、過去の様式に捕われる余り、作中と現実空間との区別を失ったかに見える唯美主義者、あるいは唯美主義の抱える側面を、「活人画」と見做しながら誇張し、滑稽化している。

またこの物語は、すでに6, 7, の男女の服装の節で述べたように、唯美主義的服装の懐古的側面を捉えて強調し、皮肉っている。そしてそこに内在した当時の女性のファッションの抱える非健康的、非衛生的な要素や、時には猥雑にまで陥る複雑さに対する古代や中世末期の簡素さと肉体の解放、また男性のファッションの一樣化と個性の埋没に対する自由な表現の回復、などの主旨が持つ近代性を無視している。そこに当時の社会のこの運動の一般的受け止め方の一例を見ることができよう。

さらに唯美主義者の服装表現の誇張された不気味さには、彼等を、世間を敵視し、俗物として蔑視し、隠遁者を気取りながら、その一方で世に認められることを秘かに願っているとする捉え方が伺える。すでに、4, で指摘したように、スブラッツ夫妻は、世間に認められるや、たちどころに、いとも容易く独特の生活様式や服装を捨て去り、ファッションナブルな服装と生活に鞍替えしている。この設定により、作者は唯美主義の脆弱さと虚しさ、あるいは愚かさを訴えようとしている。

## 9. おわりに

読者がこの作者とイラストレーターに同感を覚えたであろうことは、間もなく『チマブーエ・ブラウン一家』シリーズを始め、同種の主題が継続的に掲載されたことから想像されるが、同時にこうした頻繁な掲載が、逆に読者に親近感を与え、83年の「エスティック・ドレス」なる用語の誕生に結びついたとも考えられる。そして古風で生気に欠けた、隠遁者のものとして捉えられたスタイルが、間もなく活動性や衛生面を重視したレイショナル・ドレスと合流し、やがて今世紀ファッションの源流を成してゆくのは、皮肉なことと言わねばなるまい。

『ジャック・スブラッツの盛衰』以降の同誌の唯美主義に対する姿勢については、今後更に調査を進めたい。

## 謝 辞

本稿は、『『パンチ』誌における服装描写』と題する研究の報告の1部である。この研究に対しては、本学大学院研究科共同研究推進費(平成8~10)の助成を受けた。末筆ながらここに記して、謝意を表する。

## 註

- 1) Newton, Stella Mary; Health, Art, & Reason, dress reformers of the 19th century. London, 1974
- 2) De Marley, Diana; The History of Haute Couture 1850-1950. London, 1980
- 3) Walkley, Christina; The Way to Wear'em, 150 years of Punch on Fashion. London, 1985
- 4) Lambourne, Lionel; The Aesthetic Movement. London, 1996
- Spencer, Robin; The Aesthetic Movement. London, 1972
- 5) 拙著『ロセッティの絵画作品における女性の服装に関する史的考察』文化女子大学研究紀要第19集 1988年 参照
- 6) Du Maurier, George (1834-96)
- 7) The Cimabue Browns イタリア語ではチマブーエ。13世紀のイタリア絵画の巨匠の名をもじっている。
- 8) The Rise and Fall of Jack Spratts, A Tale of Modern Art and Fashion. スブラッツは鯀科の小魚の一種の意味がある。
- 9) "The Song of the Shirt" by Thomas Hood
- 10) Walkley; *ibid.*, p.10
- 11) Walkley; *ibid.*  
小池滋編『ヴィクトリアン・パンチ』全7巻中第4巻 柏書房 1995年  
上記2文献は部分的な紹介が見られる数少ない例。
- 12) ミノウには鯀科の小魚の一種の意味がある。
- 13), 14) Punch, or the London Charivari. Sept., 7, 1878, p.98
- 15), 16) Punch. Sept., 21, 1878, p.124
- 17) Punch. Sept., 7, 1878, p.100
- 18) Punch. Oct., 19, 1878, p.179
- 19) オノレ・ドゥ・バルザック著 山田登世子訳 『風俗のパトロロジー』新評論 1982年 p.9
- 20), 21) Punch. Sept., 7, 1878, p.98
- 22), 23) Punch. Sept., 7, 1878, p.100
- 24) Punch. Sept., 7, 1878, p.99
- 25) Punch. Sept., 14, 1878, p.110
- 26) the aesthetic young geniuses
- 27) the gorgeous young swells
- 28) Punch. Sept., 21, 1878, p.124
- 29), 30), 31) Punch. Sept., 14, 1878, p.111
- 32), 33) Punch. Oct., 19, 1878, p.178
- 34) Punch. Sept., 14, 1878, p.111